服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織

FROM United Kingdom
中野香織⑥

ダーティーなアフター

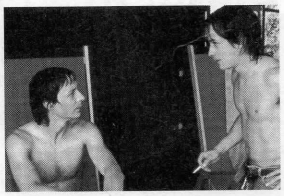
おっと、久々に敦子姐さんの辛口。予定調和もの、感動の押しつけ、そして浅底スノビズムに、敦子さんは厳しいですよね。ふふっ。もっと言ってやって。

「エンディングでも主人公が成長しないのはなぜ?」「人間の性格はそう簡単には変わらないんだよ」の観客と監督のやりとりも、いかしてますね。たしかにわたしだって性格は12歳当時のまんまだよ(たんなる開き直り……)。逆に、現実に人はなかなか変わりえないからこそ、せめて映画のなかでは主人公が変わるのを見たいのかも?

とはいえ、映画監督に変えてほしいのは、主人公の性格よりもむしろこっちの目、ですね。映画を「見る前」と「見た後」で世界の景色ががらりと一変するような映画が見たい。ちなみに、恥をさらすと、これまでの三大景色一変映画はホドロフスキーの「エル・トポ」とリンチの「ブルー・ベルベット」、そしてアルモドバルの「神経衰弱ぎりぎりの女たち」。今見るとどうってことないかもしれないのが怖いですけど。

ビフォアとアフターで景色は変わらなかったものの、男のボディの見え方が一変した映画には出会いました。「バッド・エデュケーション」です。やはりアルモドバルですが、フェレ・マルチネス(美!)の視線になったカメラが、ねっとりとなめるように見る、ガエル・ガルシア・ベルナルくんの(ほぼ)裸体。欲情の対象になる女のからだのパーツは映画ではいやというほど見せられておりますが、男が欲情する男のからだのパーツや動きというものは、いやあ……。ロマンチックなオブラートなどかかってなくて、こっけいなほどなまなましくて(実際、思わず笑っちゃった)、エロいというよりグロいと感じたところもあり。「男が男を淫視する」際の評価の基準は「セクシー」よりもむしろ、もっと直接的でケモノ的な「ダーティー」かなと憶測しました。

とりわけ見え方が変わったのが、ぎりぎりまで下げたパンツから見え隠れする、腰骨あたりの筋肉。ああそうか、ここは何よりも「男の淫視」をもっとも強く受け止めるパーツなのだな、と理解した次第。このあたりってベッカムが写真集で強調しても、下着モデルになった新庄が「女性はいちばんこのあたりがセクシーだといいますよね」(ほんとですか女性のみなさん!?)と真っ白い歯を見せつつ自慢しても、いまいちぴんとこなかったんです。でも、そういえばベッカムも新庄もナルシストですからね、いちばんグっときてたのは男の自分自身、だったのかもしれないですね。



「バッド・エデュケーション」テアトル・タイムズスクエアほかで上映中

オブジェ制作=井上陽子